鳥取市総合教育センターだより

第３号　令和５年９月２６日発行

〒680-0053
鳥取市寺町 150 番地
TEL 0857-36-6060
FAX 0857-26-3878
E-mail
kyo-center@city.tottori.lg.jp

思い出を語り　未来を語る

所長　　中村　礼子

今年も８月４日（金）に、「第５２回姫路市・鳥取市中学生交歓会」をオンラインで実施しました。各中学校の代表が集まり、姉妹都市である姫路市との交流を始めて５２年目を迎えます。３回の事前研修には、青谷因州和紙や鳥取砂丘、仁風閣などを訪れての体験活動がありました。改めてふるさと鳥取について学び、デジタルツールを駆使して「ふるさと鳥取」のよさを発信しようと、わくわくしながら仲間と協働作業を進める姿は頼もしく、未来への可能性そのものでした。

今回の指導者の中に、中学生時代にこの姫鳥交歓会に参加した教諭がいました。また、団長の校長先生は、若かりし頃、指導者の一員として参加された方でした。子どもたちに思い出を語り、希望を語る姿に、受け継がれる「ふるさと鳥取」への思いを強く感じました。

さて、今年６月に国の新たな教育振興基本計画の方向性が諮問されました。そのコンセプトは「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」です。自己肯定感や自己実現などの個人が獲得・達成していく能力や状態に基づくウェルビーイングと協働性や利他性、社会貢献意識など人とのつながりや関係性に基づくウェルビーイングを調和的・一体的に育むことを目指すとされています。その中で、子どもたち一人一人のウェルビーイングが家庭や地域・社会に広がっていき、その広がりが多様な個人を支え、将来にわたって世代を超えて循環していく姿の実現が求められています。

鳥取市総合教育センターがめざす教師像「ふるさとを思い　志をもち　社会へはばたいていく子どもたちのために　ともに学び続ける教師」は、ウェルビーイングの向上に通じるものと考えます。そして、それは教職員研修の場のみならず、姫鳥中学生交歓会で見られた子どもや教師の姿にも着実に実現されています。

（※姫鳥中学生交歓会の様子は、当センターホームページでもご覧いただけます。ぜひご覧ください。）

研修企画係

今年度の研修も約８割が終了しました。今年度もそれぞれの研修形態の特性を生かしながら、「集合方式」「遠隔会場校方式」では対面で、「遠隔各校方式」ではグループセッションで、受講者同士の学び合いを促進するための対話やアウトプットの機会を設けています。また、「My アイデアシート」の形式を改善するとともに、中堅教諭等資質向上研修・６年目研修・16 年目研修では前回の研修の My アイデアシートを持ち寄り、その後の取り組みを共有することで、受講者が研修の連続性を意識できるようにしています。

ともに学ぶ～初任者研修･新規採用養護教諭研修～

初任者研修③・新規採用養護教諭研修②より

着任してからの教育実践を振り返り、「自らの成長」や教師としての「悩み・困っていること・自身の課題」を共有しました。相互の実践に活かすことと、受講者同士が共に高め合えるネットワークを構築することをねらい、集合研修方式としています。前半は小グループで４月から夏休みまでを振り返り協議や情報共有を、後半ではセンター指導主事がアドバイザー役として加わり、課題解決に向けての協議を行いました。

振り返りシート「実践したい My アイデア」より

○たくさんメモをとること。「メモは忘れるためにある」という言葉を聞き、とても納得した。メモを取ることで頭の中を整理しながら日々の業務に取り組んでいきたい。
○毎日振り返りを書いてみようと思う。振り返りを書くことで子どもの様子を振り返るとともに、何かあったときのための記録としても使えるので、毎日こつこつと振り返りをしていこうと思う。
○生徒同士の教え合いに期待する。全体への支援や指示をしっかり伝えることを大事にする。机間指導のときの個別への支援では、全体にしっかり目を向け、多くの生徒に声をかけるようにする。

異業種に学ぶ～「校長研修」「中堅研修」～

校長研修②ではヤマタホールディングス株式会社代表取締役山田雄作氏、中堅教諭等資質向上研修④では昨年に引き続き前鳥取市教育委員山脇彰子氏を講師にお迎えし、民間でのキャリアや企業経営にもとづいた講話をいただきました。異業種の方のお話から、職業人としての在り方を学ぶとともに、学校経営や今後の仕事を進めるうえで大切にしたいことについて考える学び多い研修となりました。

振り返りシート「特に心に残ったこと」より

○部下が自発的に考えるきっかけを作るのは経営者の仕事、という言葉に感銘を受けた。先生方の成長、資質向上のために自発的に考え、何をすべきか自分で気づけるような場や機会を設定することを考えていきたい。
○「自発性誘発による、働きがいの醸成」という言葉が大変心に残った。人材育成に関して、自発性という言葉は、大きなヒントになった。
○人との関係をつくることが大切。人と繋がるということが大切。自分の話を聞いてくれる人を作ろうと思ったら、まず、自分が相手を知ることが大切。人に会ったら挨拶をすること。業務的なことではなく、相手に心を向けること。諦めないということ。
○早い時期に自分の所属する集団の全体を見渡す癖をつけなさいという言葉が印象に残った。

今日的課題を学ぶ～「副校長･教頭研修」等～

副校長・教頭研修②、特別支援教育主任研修②・特別支援学級担任研修②、幼保小中連携研修では、それぞれ「働き方改革」「多様な教育的ニーズに答える学習支援」「連続した１５年間の学び」という今日的な課題についての講義演習を行いました。講義では新しい知見に触れるとともに、大切なことにあらためて気づかされました。また幼保小中連携研修では、幼稚園保育園と小中学校の受講者が意見交換をする貴重な機会となりました。

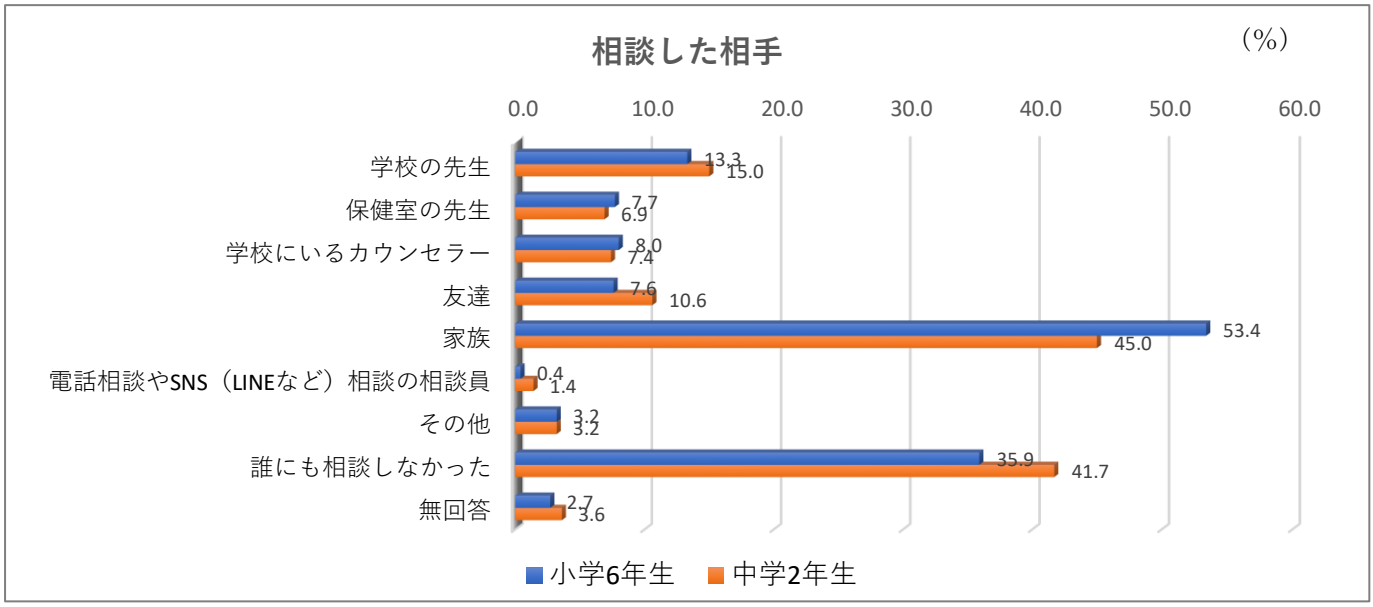
振り返りシート「特に心に残ったこと」より

○働き方改革は何のためかを問い直す。３つの趣旨を確認し、職員集団で納得して進めていくべきだと感じた。
○対話や議論をはしょり過ぎると、かえって時間がかかってしまう。たとえ時間がかかったとしても対話や議論は大切である。
○「～ねばならない」という考え方、当たり前に思ってしていることを、立ち止まって見直すことの大切さ。
○児童が困難に感じていることは何なのかを把握して、スモールステップで取り組むこと。
○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に幼稚園・保育園の先生と対話するなど、それぞれの保育や教育に対する相互理解がとても大切なこと。
○幼・保の先生方の指導法（子どもたちが興味・関心を持ち、主体的に取り組むための教材研究、生徒観察、言葉かけなどの指導）は、中学生への指導にも活かされる部分がある。

児童生徒支援係

SOS を出す力・気づく力を高めるために

年々、不登校の出現率は増加していますが、その要因や背景は多岐にわたり、支援ニーズも多様です。そうした子どもたちの支援ニーズを把握するためにも、子どもたちの声をしっかりと拾うことが大切です。



こちらは、文部科学省が実施した「令和２年度不登校児童生徒の実態調査」の結果です。対象者は、前年度（令和元年度）に不登校で、調査対象期間に学校に登校または教育支援センターに通所した実績のある小学校６年生または中学校２年生です。

小・中学生ともに家族や学校の先生への相談が多いですが、一方で、誰にも相談しなかった子どもの割合が大きくなっています。誰にも相談できず一人で悩みを抱えたまま、その間に問題が大きくなったり、解決に時間を要したりすることにつながることが心配されます。これは不登校だけではなく、いじめやトラブル等でも同じことが言えます。子どもたちが不安や悩みを抱えたときに、身近な信頼できる人に相談できる力と、家庭や学校がそれを見逃さず対応できる環境を整えることが重要です。子どもたちに次のような様子が見られたら、ＳＯＳのサインかもしれません。一人ではなく、複数の気づきを共有することで見えてくることもあります。そのようなときに、家庭や学校でできることは何でしょうか。皆さんの身近にいる子どもたちの様子に目を向けてみてください。

子どもたちのサインにはどんなものがありますか？

【こころのサイン】

□イライラしている。
□急に泣き出す。
□何にもやる気が出ない。
□成績が急に下がる。　など

【からだのサイン】

□食欲がない。
□頭痛や腹痛を訴える。
□集中力が続かない。
□眠れない。など

【行動のサイン】

□朝起きられない。
□人の目が気になる。
□身なりを気にしなくなった。
□自分を傷つける。　など

身の回りの大人ができることは？

◆日頃から子どもとコミュニケーションを取ったり様子を観察したりします。いつもと違うと感じたら声をかけましょう。
◆子どもと一緒にいる時間を増やし、ゆっくりと話を聞きましょう。そのときに、問い詰めたり、決めつけたり、大人の考えを押し付けたりしないようにしましょう。
◆子どもから相談を受けたり、SOS のサインがみられたりしたら、家庭（学校）だけで抱え込まず、学校（家庭）やスクールカウンセラー、関係機関等に相談するなどし、チームで一緒に考えましょう。